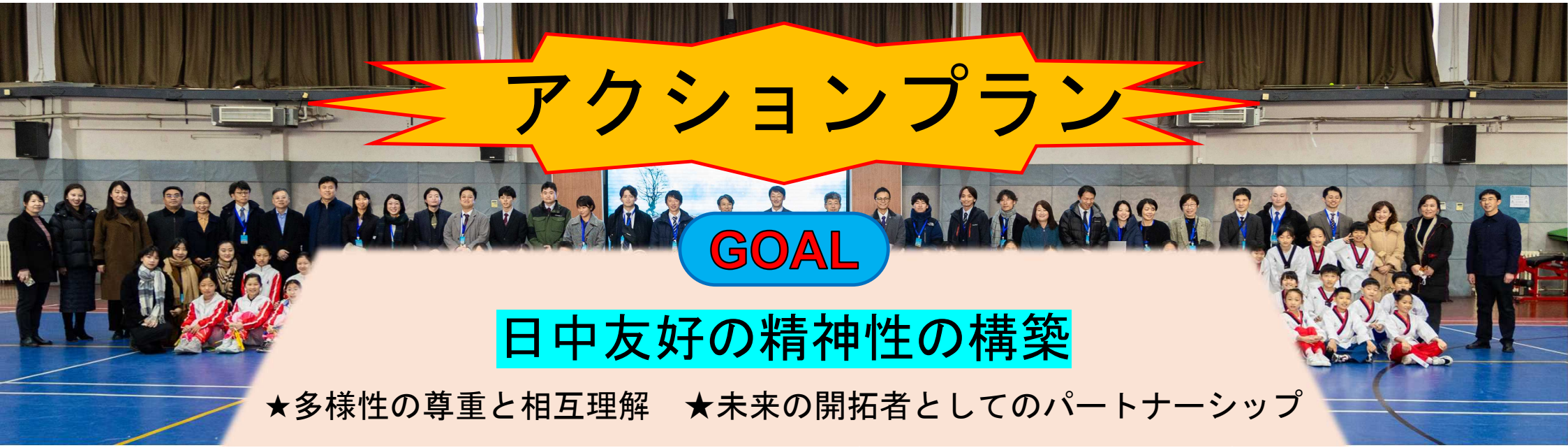
中国現地で得た経験・学び

■中国の教育
①品徳の重視（徳・智・体・美・労働）　➤社会主義の建設者及び後継者を育成
②カリキュラムの改革　➤労働・情報科学の新設、省および学校独自の教育課程
③公平なサービス　➤人口減少に伴う変化への対応、都市部と地方との集団化による格差是正
④改革とイノベーション　➤総合実践活動・プロジェクト学習の導入、地方のイノベーション
⑤教育のデジタル化　➤一人1台ではなくPCルーム、ハイレベルな教育を目指したシステム管理
⑥協働と対外交流　➤自国だけでなく世界の教育発展を目指して150か国と友好・姉妹校

■視察校での所感
〇どの学校も生徒数3000～4000人の規模に驚愕、いくつかの分校になっている
〇生徒の学びに向かう姿勢が真剣。反面、一斉指導の色が濃い。
〇学生の授業中での様子や、いつ・滞在時間・どんな本を借りたかなどの図書館利用情報などを監視し、学力向上との関連比較を行うことでハイレベルな教育システム構築を目指している
〇日本語専攻コースの生徒のプレゼン能力の高さ。第１外国語の英語なら更にレベルが高いのか

■日中の教育課題
〇教員の働き方
給与はそれほど高くないが、超勤はほとんどない。学校によっては教員の休憩室もある。
〇不登校
不登校はほとんどいない。小学生は３時にお迎えが来る。義務を家庭と学校で協力して遂行。



アクションプラン

GOAL

日中友好の精神性の構築

★多様性の尊重と相互理解　★未来の開拓者としてのパートナーシップ

TARGET	短期	中期	長期
児童	①中国への興味関心 ・中国からのオンライン全校朝会(済) ・中国交流についての講話(済) ・中国からのいただきものの展示およびプレゼント(済)	②中国小学校とのオンライン交流 ③中国小学校との手紙交換 ❹対面交流	❺中国語の習得 ❻留学等 ★次代の日中友好大使へ
保護者・地域	・中国交流について「学校だより」での巻頭言(済) ・学校ホームページでの紹介(済)	・学校経営方針の理解 ・交流事業等への参画	コミュニティスクールが 交流事業を推進
教員・関係者	・校内における中国派遣プログラムの報告(済) ・日野市教育委員会での報告会（市教委・校長・副校長） （R7.3予定）	・学校経営計画への位置付け ・海外派遣研修等の参加推進 ・国際交流事業の受入校	アクションプランの継承 次の担い手へ

中国現地で得た経験・学び

【「プログラムの目的」の視点から】

中国教育部や西安市教育委員会の訪問時に教育改革等の施策説明を受けたり、**学校訪問**において学習環境や子供の姿を実際に観察したりして、**中国の教育事情に関する知識を得て中国に対する理解を深めることができた**。

日本教職員交流団が進んで本プログラムに取り組み、LINEで連携するなど、**教職員のネットワークを構築し、日中間のネットワーク構築に向けた取組を始めている**。

日中教職員間で考えや教育実践を十分共有できたとは言えないが、**多様性を認め合い、相互理解に向けたやりとりが交わされ、互いに友好的かつ肯定的態度が感じられた**。

個人的に貴重な経験は、「①記念品として顔真卿の写しを受け取ったこと、②西安の学校図書館で「西遊記」を見つけたこと、③兵馬俑博物館から『本物と出会う』大切さを感じたこと④新たな教職員との出会いがあったこと」である。

【「テーマ」との関連から】

AI・ICT等を活用した新たな学び（教具・手段）が導入されていくことが予想される。取り組んでいる教育施策・授業の型や方法・「個」への手立て（方略）は似ていても、眼には見えず、耳には聞こえにくい**価値や意義、目標といった「学びの本質的な考え（問い）」を見失うことなく、学びを連続していく**ことが大切である。

「未来を拓く」子供達に何を願い、何を伝える必要があるかを考え続ける教職員であることも重要である。

「今を生きる」子供達が、多様な人とつながり、学び続けようとする「個」へと変容するために、教職員自身が保護者や地域の方々と連携・協働して子供を主語とした学びを実践しながらも、**変化する社会とつながり自ら異文化（異言語・異世代）との相互理解を願い、自らの生活や社会教育等の場で自ら学び・高め続ける「個」でありたいと考え生活する**姿が、「新時代に求められる教職員像」と考える。

アクションプラン

1　発信

■校内での全校朝会・職員研修
■保護者・地域の方々に本プログラムを紹介（学校だより「特集記事」）
■国内外の教職員ネットワークとの連携

2　働く↔生きる

■職場での知識・技能等を生活で活用、生活での知識・技能等を職場で活用

働き方（省察的実践家）

■社会に開かれ教育課程の実現（CS等）
■異文化（異言語・異世代）の人々とつながり、多様性・相互理解への実践・提案
■価値や意義、目標といった「学びへの本質的な考え（問い）」を見失うことない「学びの実践・人材育成」
■地域の博物館・美術館（社会体験・自然体験関連団体）等の教育資源との連携強化

相互活用

貢献希望

生き方（探究的生活者）

■社会・経済（他業種）とつながり、「人・もの・こと」から学ぶ人間であり続ける
■自己の興味関心について、探究的に学び・高め続け、自らの可能性・多様性を求める
■変化する社会とつながり、ICT・AI等を効果的に活用し、自ら異文化（異言語・異世代）との相互理解を願い、生活・社会教育等の場で自ら学び・高め続ける「個」

持続可能な社会の創り手の育成・日本社会に根差したウェルビーイングの向上

中国現地で得た経験・学び

○街中に溢れる社会主義

・社会主義核心価値観

至る所（歩道・学校..etc.）で
この文字を見た。約14億の人口をどのようにまとめているのか常に疑問に思っていたが、視覚的に示すことで国民の心には常に同じものが刻まれているのだろう。

・統一感のあるカラー

学校訪問を通して「赤」の印象が強く、これも国への愛国心のような、忠誠心のようなものを感じた。

○教育強国、中国

・家/学校/社会の結束

家　＝子どもの第一の学校
社会＝子どもの最大の学校（教育部）
学校「常に頂点を目指し、困難にも立ち向かって歩む」「子どもを中心に考える」（北京景山学校）

・教員・生徒への支援

教師の権利を守り、働く環境や悩み事のケアを行う組合があった。また生徒に向けた心理的ケアの部屋も充実。

・生徒たちの不安

進学への重圧で不安が大きいと言う。

○歴史と技術の融合の国

・数千年の歴史

技術の発展は目覚ましく、社会や教育現場でもその成長を見ることができた一方で、街の風景・人々の考え方の中には古くから伝わる教えが浸透している印象。訪問した世界遺産「兵馬俑」ではその偉大さを感じた。

・最先端のAI科学技術

日本ではあまり見ることのない、教育現場でのAIの大々的な活用を目の当たりにし、歴史ある国である同時に、常に前進し続けていることもわかった。

アクションプラン

「何のために交流するのか」について考える

中国派遣の最後の夕食会での井上先生の上記の言葉が印象に残っている。勤務校は国際交流の多い学校であるので、一度立ち止まり、このことについて教員のみならず様々な職業の人たちと考えたい。

生徒・教員への共有

生徒には帰国後に授業内で簡単に中国での経験などを話した。1月末には教員への報告会を予定している。自分の言葉がその人のもつ中国の印象になってしまわないようにしたい。特に教員同士の繋がりの強化や生徒へのケアについて話したい。

学校同士の繋がりを作る

今回の派遣で訪問した学校や西安教育局が今後紹介してくださる学校とのネットワークを維持し続ける。現在、他国と行っているオンライン学習会の規模を大きくし、様々な考えをもつ人と共存してることを生徒に実感してもらいたい。

今回出会った先生方を尋ねる！

ACCUが与えてくださったこの派遣に感謝し、そこでお世話になった参加者の皆さんと今後も学校教育・国際理解教育など多様なトピックについてお話ができたら幸いです。。。。

中国現地で得た経験・学び

・子どもたちの成長のために「最善」を模索する国・学校・教師の姿。
➡目の前の子ども一人ひとりの人間性を大切にし、個別のニーズに沿ったカリキュラムを模索している学校や教員の方々のご苦労を感じた。また、国や省の定めるカリキュラムと学校裁量のカリキュラムを上手く融合させ、学校独自のカラーをその学校の強みとして前に押し出すことによって、より学校での学びが洗練されているように感じた。

・国際理解教育への具体的な取り組みとその取り組みによって着実に力をつけている子どもたちの姿を見ることができた。
➡他国（特に日本）への大きな興味と関心をもとに、子どもたち自身が「日本のことを知りたい」「日本人のことをわかりたい」と言う思いを膨らませていた。他国と繋がるには、まず徹底的に相手の国やそこに住む人々のことを知ることから始まると感じた。

・大学での【教育×ICT】の（近い）未来の様子。
➡小学校～高等学校において、授業の様子や個人の学校生活の様子といった大容量の情報をAIが分析し、その結果を授業者や子どもたちにフィードバックするようなシステムは、授業改善や学びへの姿勢の改善に大いに役立つものだと感じた。現在は、大学での実験検証段階であるが、そう遠くない未来、AIを活用した授業実践や生徒指導が行われる日が来てもおかしくないと感じた。

アクションプラン

1. 今回のプログラムで見聞きしたものを学校の職員及び児童と共有する。2024.12
2. 児童の海外への興味やそこに根付く文化・人への関心を高めるため社会科を中心に学習を進める。「国際理解」や「多様性」といった内容については、道徳でも取り扱うことによって中国の『人』について焦点を当てることができると考える。2025.1~3
3. 学習を通して、実際に中国の人や文化に触れたいという声を実現していく。2025.4~
4. まずは非同期でのビデオレターやメールでの相互交流を図る。そこからオンラインでの顔合わせを経て、最終的にはモノづくりへと繋げていきたい。例：互いの町の紹介（3～６年）、伝統食のレシピ交換で互いに相手の国の伝統食を作ってみる（5～６年）、教職員交流
5. 可能な範囲でリアル（対面）での交流を計画していきたい。

中国現地で得た経験・学び

・プログラム全体を通して
　真心の歓待に感動した（各所での歓迎行事、贈り物、宿泊施設・食事等への配慮）

・教育政策に関して
　品徳教育を肝要とし、全６項目で教育政策がデザインされている
　公平性、国際性、デジタル技術の人道的活用などに重きが置かれている
　一人一台端末の配備は行われていない（PCルームが整備されているため）

・視察先（学校訪問）に関して
　（管理職の）勤務校に対する誇りが高いと感じられた
　師弟同行の慣習がある（生徒と教師が整然と校庭を並走していた）
　教育における「義務」を「児童・生徒は学校に通い、学ぶ義務がある」と捉える
　教員の福利厚生が充実しているように感じられた（教員用カフェの設置）
　例外を除いて、日本の教育公務員と採用制度が異なる（中国では学校採用）
　校舎は主に近代建築様式であったが、洋式化されたトイレは皆無に等しかった

・建造物について
　建造物が大きく（高く、広く）感じられた（前門大街など異なる場合もあり）

中国は博大精深であるゆえに、この度の一見は九牛の一毛である

アクションプラン

生徒にむけて

交流授業（美術鑑賞）を実施

目的：中日の生徒が
自国の美術の魅力を互いに伝え合う
交流国の美術の魅力を感じ取り、称え合う
地球の共通遺産を味わいあう
上記を通して、全人的な成長を促す

勤務校に向けて

職員に対して、報告会を実施

目的：各教職員が
中国の教育について知る・学ぶ・考える
自身の教育活動を相対化する
全人的な成長に資する教育活動を哲学する

自分自身において

自身の教育活動の発展と年間指導計画の改良

市教育委員会に対して

日南市ならびに串間市教育長に報告会を実施

目的：本プログラムの魅力を伝える
本プログラムの重要性を伝える

地域にむけて

報告会を実施

目的：地域の方々が
中国の教育(の一部)を知る・学ぶ・考える
二国間・多国間協働の重要性について考える

中国現地で得た経験・学び

①中国の教育について（中国教育部・市教育局・各訪問校での懇談より）

基礎教育の目標を社会形成のための人材育成とし、「公平でハイレベルな教育」を提供すべく、カリキュラムの標準化やICTを利用したリソースの共有、地方農村部への人 的サポートなどに力を入れているということであった。個の人間形成に重きをおく日本との目標の違いや広大な国だからこその課題や取り組みには興味深いものがある。

一方で、家庭・学校・社会の連携、課題を抱える児童生徒への関心と支援、SDGｓへの取り組み、知識教育から共学による思考力の育成など、 日本の学校教育と共通する 部分も多く、それぞれの国の政治や社会構造、文化に違いはあっても、教育者としてはほぼ我々と同じベクトルを向いておられることに安堵感も覚えた。どこの訪問先でも「科学技術」と「国際教育」の言葉を聞いたが、国の教育計画が、各省や市の教育局を通して学校現場まできちんと浸透しているように見受けた。

②現地校視察で

実際の教育現場を見ることは、最も期待していたことのひとつである。中学校卒業時に大きく進路を分けら れてしまうという中国の中学生たちの学習の様子、校内に張り出された優秀な生徒の写真やテスト結果などに、知識重視になってはいないか、生徒や教師に重圧になってはいないかと感じたのは、一部しか見ていない者の偏った見方だろうか。

しかし一方で、地域に散在する歴史的、文化的リソースを利用した学習や、古くからの書や芸術を取り入れた学習成果物の校内掲示などを見ると、さずがに数千年の歴史と文化をもつ中国ならではの豊かさを感じた。

③所感

自分の目で見て、自分の心で感じ取り、考えるという事がいかに大切かということを再確認できた訪問であった。

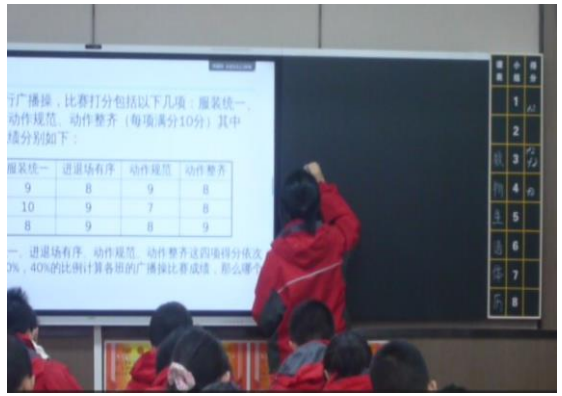
中国教育部の賈鵬副司長の言われた「百聞は一見に如かず」、そして、それに続けられた大西団長の「百見は一考に如かず」「百考は一行にしかず」の意味を重く捉え、この訪問で得たことを今後の学校での「一行」、自身の生き方での「一行」に繋げていきたい。それをもって、我々に多くの時間や労を割き、歓待の意を表してくださった中国の方々、両国の政府やUNESCOの方々への返礼となればと思う。

今後のアクションプラン

①教職員への伝達・還元

中国で見聞した情報を共有することで、外国につながる児童生徒の背景や母国の教育環境につ いて考える機会を提供し、よりよい支援の構築に繋げる。

・校内報告会の開催
・「日本語教室通信」を通して、市内小中学校への情報提供
・外国につながる児童生徒指導担当者に対して各種研修会での情報伝達



②児童・生徒への還元

中国について紹介する機会を設けることで、共に生活する中国につながる児童生徒への理解を深める。

また、多くの国のそれぞれの文化や伝統を尊重しようとする心を育むと共に、多様性を受け入れてそれぞれの良さを生かしながら共生しようとする思いを培う。

・児童生徒への中国についての紹介

③外国につながる児童・生徒への還元

自分がつながる国について考える機会を設け、アイデンティティの再認識の一助とする

・児童生徒の母国について考える機会を設ける。

土産の書を訳す本校の中国人生徒

④自身の指導法の改善

学んだことを、今後の日本語教室での指導法の見直しや教材開発に生かす。

中国現地で得た
経験・学び

「美しい生活」を目指して

中国現地で得た経験や学びを
５つのキーワードでまとめました。

01
国家主導の教育体制

教育制度やカリキュラムは国家によって管理されており、全国的に統一された教育が行われている。これは、人材育成を通して国家の発展を目指すという意図に基づいている。

02
熾烈な受験戦争

中国の大学入試（高考）は人生を左右する最重要事項であり、競争は非常に激しい。とはいえ、基礎学力の高さや生徒の勤勉性を強く感じた。一方で、子どもたちの自然な笑顔も印象的であった。

03
教育の地域格差

都市部と農村部で教育水準に大きな格差を感じる。都市部では高度な教育を受けられる一方、農村部では教育資源が不足している地域もある。同都市内でも受けられる教育は様々。この格差是正は中国教育の重要な課題であるとのこと。

04
品徳

品徳は、単に知識や技能を持っているだけでなく、人間としてどうあるべきか、どのような心構えや行動規範を持つべきかという、内面的な価値観を重視している。教育から、強国・大国を作っていく個育てを感じた。

05
歴史と文化

広大な大地で育まれた多様な文化と、数千年に及ぶ歴史を持つ中国。伝統と革新が織りなす歴史文化は、今なお、街づくりや教育にも引き継がれ、現代社会の発展や未来の創造に大いに活かされている。

「美しい生活」という言葉が特に印象に残っている。なぜ教育をするのか、教育を施した先にどこに向かうのか、強いとは？賢いとは？優しいとは？　教育は「美しい生活」にむかって行われているのだと私自身もはっとさせられた。まさに「百聞は一見にしかず、百考は一行にしかず。」 学び得た経験を、今後の活動に活かしていきたい。

01 子どもたちへ

体験が興味を広げ、興味が知識につながる

私は、これまでおとなりさんのこともちゃんをわかっていなかった。目の前に見えていることさえ、ちゃんと理解しようとしていないかもしれない。私たちが今回の中国研修で体験して感じたことのように、まず一歩何かを知ってみる、何かに触れてみるという機会を作りたい。それは、何でもいい。新しいこと、身近なこと、違う感覚のこと。活動の大きさは様々であれど、子どもたちの成長につながる「教育の種まき」をしていきたいと思う。

【アクションプラン】

・中国理解活動（中華料理体験予定）

・各種体験交流活動

02 大人たちへ

大人が学びを楽しめば子どもも学びを楽しむ

学びに限ったことではない。学習、生活、労働、生きることのすべてが、大人から子供への教育的プレゼントなのである。今回の研修が、こんなにも楽しくて、有意義で、心躍ったように、子どもたちと関わる大人すべてが、夢・希望・ワクワクに満ちていたい。そのために、私にできることを行動していく。今回の研修報告や実践の発信をする。そして、自分自身が「美しい生活」の１つのロールモデルになる。

【アクションプラン】

・教員向け研修報告、中国理解活動

・YouTube、Instagram等、SNS発信

・美しく生きるための情報発信

03 自分自身へ

いつまでも「変わり者」でありたい

中国基礎教育からも、一緒に研修した仲間からも多くのことを学んで、また一つ「変わり者」になれた気がする。新しいことを学び、そしてまた次の一歩を踏み出す。一度きりしかない人生なのだから、自分も笑っていたいし、自分の周りにいる人も笑顔でいてほしい。心ときめく時間を増やしたい。自分が生きる世界だから、みんな平和でいてほしい。だから、変わるのは自分自身。変えられるのも自分自身。

【アクションプラン】

・新しい挑戦と自己研鑽

・M-1グランプリ出場

・変わり者から、変える者へ

中国現地で得た経験と学び

〇中国の教育方針と価値観

・中国は知識習得と基礎的な学力の向上に重きを置いている。その価値観が保護者にも広く浸透しており、教育熱心な保護者が多い。さらに、中国は不登校児童ほぼ０を達成している。社会全体への貢献を重視した教育を展開しており、社会主義を浸透させるような看板や教育活動が校内各所で見られた。日本の「個々の学び」を重視した教育方針とは異なる視点が印象的だった。

・ICTやAIの活用や教育格差縮小への国家的取り組みを掲げており、教育政策が教員レベルまで浸透している印象を受けた。

〇異文化交流の現状

・校長をはじめとする教員の教育への熱量の高さが印象的であり、海外の学校と異文化交流を実施している学校が多かった。しかし、生徒のレベルが高く都市部の、国が力を入れている学校は様々な国と交流しており、オンライン交流や現地に訪問をして交流しているが、地方などの学校では交流をほとんど行っていないのではないかと推測できる。

〇英語教育について

・中国では、日本と同様に急速に変化する情報社会に対応できる人材育成を急務としており、、世界共通語である英語力の向上に力を入れてる。特に若い世代は英語の習得率が他の世代よりも高く、文法の知識や会話能力も高い。訪問した学校の英語力はそれぞれ違うが、トップクラスの学校では発音もよく、英語を含む3か国語を話せる生徒も見受けられた一方で、一般的な学校では中学生レベルの英語でも受け答えに苦労する児童が多かった。

アクションプラン

○学校内での国際教育の推進

・プログラムで見聞きした中国の様子を校内の児童・教員に共有した上で、異文化をテーマにした授業や、グローバルな課題を扱うプロジェクト型学習を展開する。
・他教員に指導案や指導法を積極的に紹介する。特に、５年生の外国調べや英語科の授業内で国際教育を積極的に取り入れ、異文化への理解力向上を目指す。

○教員向け研修の実施と市内での共有

・調布市英語研究会の教員を対象に、プログラムで得た最新の中国の様子や教育政策を共有する研修会（２０２５年１月２９日実施予定）を開催する。
・研修会では、オンラインでの国際交流や手紙・メールなどによる交流の手順について話し合い、他の教員の計画と重ね合わせてブラッシュアップを行い、教員が国際交流を始める上での基礎知識を増やす。

○地域との連携強化

・地域全体で国際教育やグローバル教育への理解を広める支援活動を推進するために、調布市教育委員会に働きかけ、オフラインでの交流や国際姉妹都市との交流を実現するよう継続的に呼びかける。
・地域の団体や保護者と協力し、児童が多様な視点で学べる環境を整備する。
　（例：ゲストティーチャーや外部人材による出前授業）

○中国との国際交流プログラムの推進

・プログラム内で交流した中国の学校と連携し、児童が互いに文化を学び合うオンライン交流プログラムを設立する。具体的には、手紙交換、メールでのやり取り、共同プロジェクトや文化発表会を実施する。

プログラム参加の成果と振り返り

1　中国の教育の概要

(1) 社会主義の国家を育てる人材の育成が最終目標になっている。

(2) 義務教育が全国に実施されたのは１０年程前。全ての子どもたちの学ぶ権利が保証されてからは、まだ歴史が浅い。

(3) 都市部と農村部との学校環境は、物質的、金銭的、教員の質的にも差がある。しかし、オンライン授業の配信や、インターネットを利用した様々なコンテンツが用意され、それらを活用することで授業の質を高めている。

2　日本との違いと学び

(1) 1クラス50人と生徒の人数が多い。その中で個に応じた指導をしようとしている。

(2) 高校入試、大学入試のシステム。高校入試、大学入試ともに地区あるいは全国統一の試験を行うことで公平性を保っている。

(3) 高校の進学率は50%。中学校の成績の上位50%しか高校に進学できない。高校に進学できない生徒は、専門学校にいくことになり、この時点で大学に進学できないことになる。そのため高校に進学するために「受験戦争」は激化しており、中学生は、とても忙しい生活を送っている。

3　新たな視点

(1) 進学できる人数が限られていることで「受験戦争」が激化することは、マイナス面でもあるが、一方で子どもたちが熱心に学習に向かう姿勢が見られた。日本では少子化に伴い、子ども数に対して高校の数が多くなっている現状があるため、「〇〇高校でいいや」「勉強しなくても〇〇高校には入れるだろう」という考えの子どもたちが、特に地方や僻地では見られる。そのような子どもたちの学ぶ意欲を、どう高めていけばいいのか考えていきたい。

(2) 中国の学校には「不登校生がいない」という答えを聞いて非常に驚いた。中国では「学校に行くのは当たり前」「先生は尊敬の対象」ということが今も息づいているそうだ。日本は物質的に豊かになり、多様な考えを尊重していく恵まれた時代にありながら、子どもたちの心の有り様、学校に対する考え方、学ぶことへの意欲という面で課題を感じた。

今後のアクションプラン

1　平和教育・国際理解教育の実践
・まずは直接、直に知るところから。オンラインでの交流授業を行う。

2　ESDの実践
・それぞれの国の歴史や文化、伝統を大切に考え、多様性を尊重しながら、持続な可能な世界の担い手を育むための授業を実践していく。そのために、自分の専門教科である国語では「漢詩」や「書写」など共通の学習を合同で学ぶような授業を計画し実践する。

3　大学の配信授業を活用
・西安電子技科大学では、多くの国々がオンライン授業のコンテンツを活用していると聞いた。内容的には中学校の社会で活用できそうだったので、同僚の先生方に広く存在を知ってもらえるようにしていく。

4　阿智村と中国とのつながりを軸とした総合的な学習の時間のカリキュラムの作成
　阿智中学校がある阿智村は、戦前戦中に多くの村民を満州に送ったという歴史がある。その人々の体験から平和への願いを込めて、「満蒙開拓平和祈念館」が設立されている。しかし、年々「満蒙開拓団」について学ぶ世代が減ってきており、思いを継承していくことが難しくなってきている。そこで中学校の総合的な学習の時間の中核に据え、平和教育やキャリア教育、人権教育と関連させることはもちろん、教科横断的な学びができるようなカリキュラムを作成していく。

学ぶことこそ
国際交流

共同体に貢献することを望み、あるいは貢献できることこそ民主主義の中心課題なのである。参加への意志は個々人の責任感に基づくものだということを忘れてはならない。
ジャック・ドロール

2

教師・保護者・生徒
の役割の明確化

教師（授業
をする）

保護者
（教育を受け
させる）

生徒（勉強を
する）

<u>単純な国家間比較からの脱却</u>
１、教育目標
中国：社会主義現代建設の完成
日本：人格の完成
２、国土面積（２６倍）
小中学校の児童生徒数（１６倍）

日本は○○、中国は○○
→紋切り型の議論から
グローバル社会を生きるための資質を研究

心に平和の砦を
築く

1, 中国訪問記をTeams投稿
（全教員全生徒への配信）
2025年1月

2, 国際理解の授業を毎年作り続ける
～2050年まで

3, 中国の学校との学校間交流の立ち上げ
2025年11月

4,　教育委員会にて国際交流プログラムの立ちあげ、推進
2028年11月

5, 2024年中国政府日本教職員招へいプログラムメンバーに毎年会う→点呼します！！！

中国現地で得た経験・学び

○社会主義の良い点を知ることができた

・教員のモチベーションが高い、教育に対する熱意を感じた

→教育目標や理念が統一されており、明確で分かりやすい

（社会主義国家建設のため、社会のため）

→労働環境が整備されている

○違うけれど同じ

恥ずかしながら日本語を懸命に話す生徒

卒業旅行で日本に行くんだとキラキラした目で語る学生

自己紹介をして握手をすれば笑顔になる子供たち

→私たちが普段日本で関わっている子供たちと何ら変わりはなかった

アクションプラン

①日本と中国をオンラインで繋いで交流をする

→今回できた繋がりを大事にする

②地元の小学校・中学校をはじめ、山形県内の各学校で講座を実施する

→より多くの人に中国について知ってもらう

③日々の授業を充実させる

→生徒にとって中国がより身近な国になるように授業を展開していきたい。

生徒自身が「自分も中国に行ってみたい」「中国の人と関わってみたい」と思ってもらえるような取り組みをしていきたいと考えている。そうすることで中国と日本が持続的につながっていくことができると考えている。

本プラグラムの成果（振り返り・学んだこと）

■日本と中国の教育の目標の違いにより教育方法・教育の在り方が変わる→教育理念の重要性

中国の教育目標		日本の教育目標
国家は社会主義の教育事情を発展させ、全国人民のレベルを向上する	⇔	教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成を育成

常に時代が変化する中、世界規準の教育理念を創造し、対話を通じ「あたらしい学び」を考え続ける

↓

新時代に求められる教職員の姿

■世界規準の教育の創造として活用したい中国での参考事例

教育のデジタル化…遠隔地の子どもへの教育の保障（教育格差の是正）
AI等のビッグデータを活用したエビデンスのある教育法

子どものメンタルケア…子どものメンタルケアルームの整備
教師のメンタルケア・働き方のケア

自然環境への意識…世界規準で自然環境のために行動する意識

写真1　西安電子科学技術大学のAI活用

アクションプラン（3ヵ年）

■2025年（1～3月）中国の江蘇省・溧陽市の小学校とオンライン交流

・社会6年「日本とつながりの深い国々」　…中国の生活・文化を知る。
・総合6年「世界ジオパークの魅力の紹介」…地域の魅力を紹介する。

■2025年（4～12月）海外交流の実践を広める

・海外交流の実践成果を検証し講演や論文で投稿する。

■2025年（9～12月）海外教員受け入れ校として児童・教員の交流

・海外教職員と児童・日本教職員の対話を重視した交流から多くの人々の世界平和の意識を高める。

■2026年（9～12月）子どもユネスコ世界ジオパーク交流会の開催

・ユネスコ世界ジオパークをテーマに世界の国と交流をする。

中国で学んだこと

①教育格差是正
国家を上げての改革中で、教育によって中国のみならず世界全体に貢献していきたいという、地球規模での言葉や目標が多く聞かれた。その実践として、教育の重要度を保護者、教員、生徒たちが理解し、常に情熱を持って臨んでいるように見て取れた。地方と都市部の差を無くし、機会均等を実現していく中国の目標を知った。

②教員の労働意欲
学校を支える教職員の労働環境に日本との違いを感じた。中国の教職員の方が持つ向上心や熱意を維持していくには、心身の健康が大切であり、かつ職場で誇りを持って働くことができているという意識の違いなのかと感じた。情熱的な教育には教職員のエネルギーが必要であり、生徒に多いに影響することを改めて実感した。

③地域の特色、学校の歴史への誇り
地域の歴史や学校の特色や伝統をしっかりと先人から受け取り、未来に繋げていこうとする高い意識を感じた。日本も地域教育を行ってはいるが、学舎に対する誇りや愛情を中国は強く持っているように感じた。それが、学ぶことに意味と目的と誇りを持たせている。新しいことに挑戦していくこともまた、先人から受け継いだ精神なのだという受け止め方に今後も途切れることのない力強さを見出し、中国と日本の根本的な差異に思えた。

①教育格差是正
⇨ ここから、視野を広く持ち続けることを意識。
　地域や近隣校との協力・連携することで教育活動の焦点を広げる。日本の教育が世界をどのようにより良くしていけるのかを繋げて考えてみる。

⇨

⋆生徒に対して
　課題探究合同発表会を企画し、自分の考えをを共有する相手を確実に広げていく。
　授業を通して、世界の現状と世界の中の日本について生徒に問いかけ続ける。
⋆地域に対して
　地元の先生方とのネットワークを活用して、活動を共有、課題解決していく。他地域の取り組みに関心を持ち続け、視察に行く。

②教員の労働意欲
⇨ここから、職場での向上心の維持や能力を十分に発揮できる環境づくりを意識。
　同僚とのチームワーク、個に応じた勤務、一人一人が持つべきリーダーシップをどう実現するか考えてみる。

⇨

⋆同僚に対して
　評価し合う、褒め合う、お互いに関心を持ち続ける。コミュニケーションをとる時間を小さく多く準備する。特に、得意なこと不得意なことを把握し合い、無理に個で完成させないことを声がけしていく。
⋆生徒に対して
　心身健康で目標を持って働いている姿を見せる。

③地域の特色、学校の歴史への誇り
⇨ここから、交流の重要性、他者を知って自分を客観視することの大切さを意識。
　自分の普通を疑い、他者経由で自分に関心を持たせたい。

⇨

⋆生徒に対して
　誇りをもつことで得る強さを、生徒に体感してもらえるように教育活動を工夫する。国際交流の機会を年に3回は設けて、アイデンティティの確立の機会と位置付け、自己の成長を感じることができる機会にしたい。自分に誇りを持てる学校にしていく雰囲気を大切にする。

中国現地で得た経験・学び

中国における労働者保護の視点

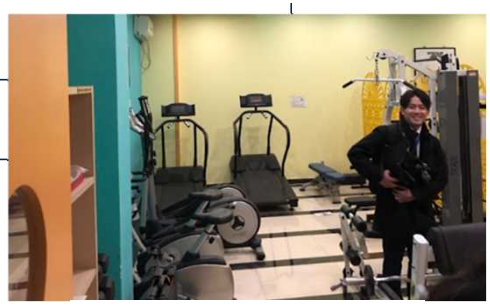
・社会主義国家として労働者保護が重視されている
・教職員も「労働者」として尊重され、健康と働きやすさが配慮されている

【管理職へのｲﾝﾀﾋﾞｭｰ】

具体的な取り組みの例

＜北京景山実験学校＞
「教工之家」厚生施設：ﾘﾗｸｾﾞｰｼｮﾝﾙｰﾑ、遊戯ﾙｰﾑ、ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞﾙｰﾑなど
＜西安交通大学付属中学＞
超過勤務を禁止し、教職員の健康を優先している

【「教工之家（教師の家）」と称した厚生施設】



【教師用ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞﾙｰﾑ】

学びのポイント

・教職員が働きやすい環境づくりが、教育の質を高める基盤となる
・日本の現状と比較し、改善のための参考資料として非常に価値がある

アクションプラン

現状の課題整理（日本の教職員労働環境）

・給特法による36協定対象外の問題
・長時間労働が常態化しており教職員の健康や生活に悪影響を及ぼしている

中国視察から学んだポイントの応用

・教職員を「労働者」として捉え、健康や休息のための校内での施策を導入
・学校内のリラクゼーションルームや健康促進設備の充実を検討

今後の具体的な取り組み提案

短期的な目標（R7.1～R7.2）

・現場教職員へのｱﾝｹｰﾄ実施
・改善ﾆｰｽﾞを把握

中期的な目標（R7.3～R7.4）

・ｱﾝｹｰﾄを基に対話の場
・具体的な見通しの合意

長期的な目標（R7.5～R7.9）

・ﾘﾌﾚｯｼｭｽﾍﾟｰｽの確保
・ﾏｯｻｰｼﾞﾁｪｱ、ｿﾌｧ等設置

中国現地で得た経験・学び

１．教育環境の充実とその効果

視察した学校の教育環境は、非常に整っていた。また、整えることへの意識も中国としても、学校としても積極的に感じた。児童生徒も教育環境の充実が自分たちの成長や学力向上、将来設計にどれだけ影響し、結びついているかを実感していた。今までの在籍校は…、岩手県の意識は…、と考えると、早急に改善を図らなければいけない。金銭的に、物理的に限界を感じ、半ば諦めていた部分について、自校の教職員、市教委、行政とも強固な共有と連携を推進していきたいと感じた。来年度の自校の研究の一部に「教育環境」を設け、成果を検証していきたい。そして、釜石市、岩手県と教育環境が充実していくことを視野に入れて、取り組んでいきたい。

２．学校の特色・誇り

視察した学校は、自分たちの取組、成果に誇りをもっていた。それほど、教育に情熱をかけていたことを感じた。日本でも、日々先生方が授業に励み、子供たちに寄り添っている。しかし、学校運営側としての年間計画や将来のビジョンをどれほどもっているかということは考えさせられた。過去の栄光は、積み重ねの証であり、継続して発展を意識していることでもある。「今」だけを意識せず、しかし、「今」も大切にしながら、学校運営・計画・推進に力を入れていきたい。

３．国際理解教育の重要性と今後の可能性

日本は３年生から本格的に外国語や外国の文化に触れていく。しかし、教科書やデジタルの世界だけでなく、目の前のことと考えた国際理解教育はまだまだであると考える。中国は、早い段階から諸外国を意識し、多様な文化に直接的に触れている。これからの子供たちは、自分たち以上に地球的な視野をもつ必要があり、その環境を学校が築いていかなければならない。中国に３年間住んでいたこと、今回のプロジェクトに参加したことを積極的に発信し、国際理解教育を推進していきたい。

アクション・プラン

①　報告・授業

▢【児童】**中国紹介(済)**　【教職員・市教委】**中国の教育事情・今後のプラン共有(済)**

▢各教科でのゲストティーチャー(中国)的役割を果たす(社会、総合的な学習の時間、道徳　等)

②　交流を進めるために

(1) 自校の教育課程の再構築(済)(地域・市町村・県の学習、総合的な学習の時間　等)

⇒釜石市の魅力、学校の魅力の再確認　⇒　目的・自信をもって交流できる

(2) 交流(オンライン)学習の構築　⇒　国際交流までのスモールステップ

▢中学校区間交流(日常の学習)⇒岩手県内外との交流(市町村・都道府県比較)⇒**国際交流**

▢**防災学習の成果、震災復興の足跡を世界共通の財産へ**

⇒釜石市の子供たちが地球的な視野をもったり、国際的な広がりをもったりする

⇒釜石市から日本全国へ、釜石市から世界へ

(3) 教育環境の充実　⇒　誇りをもつことで発信も積極的になる

▢児童が自分たちの学びや学習に誇りをもつ(授業研究の充実、教室・廊下環境の改善　等)

▢教職員が働く環境に満足する(５時間授業の設定、積極的な午前授業の設定⇒児童に還元)

プログラム参加の成果と振り返り

1. 中国の教育の概要

- 知識獲得が第一の目標として一斉授業形式を多く採用している印象。
- 校長が資金等をやりくりしている。学校が優秀な教員を採用していて、教師を紹介する展示等があった。教師の授業力を上げるための各教科の会議などが定期的に行われている。労働環境を整えるために、教師の休息室やジムなどがあった。
- 親の教育熱心さが印象的で、校区変更もいとわない。
- 学歴社会で、高校・大学受験で失敗すると、今後の人生においての選択肢の幅が狭まる。

2. 日本との違いと学び

- 学びの共同体や自律した学習者の理念は日本と類似。
- 生徒の自律学習の点で課題を感じた。総合的な学習の充実度は不明。
- ICTの活用は教師主導。日本のGIGAスクール構想の優位性を実感。

3. 新たな視点

- 教師の待遇は決して良いとは言えないが、時間外労働は厳しく規制されている。教員のメンタルケアが充実。
- クラス替えを行わないことで、クラスの結束力を高める試みに注目。
- 「愛国教育」という言葉は、日本では誇張された表現だと感じた。国の歴史などを深く考えることは国として大事なことだと感じた。

今後のアクションプラン

1. 新たな授業の工夫
- 探究型学習プロジェクトを展開し、生徒の主体的学びを促進。

2. ICT活用の深化
- GIGAスクール構想を活かし、個別最適化を導入して学びの幅を拡大。

3. 異文化交流の推進(まずは自分がやってみる！来年の目標！)
- 海外の学校等と交流イベントを実施。

4. 地域文化と教育の融合
- 地域文化を活かした授業を設計し、生徒の出身の土地への理解を深める。

日本は全ての項目でトップレベル！！(PISA2022の日本の結果)
先生方の頑張り！　一人一人に目を向けた教育が素晴らしい！
分厚い中間層が鍵！これからもよろしくお願いします。

中国現地で得た学び

・教育事情

・中国の教育事情

　通訳の方が話していた「高校入試で半分の人は高校に進学できない」という言葉がとても印象に残った。このプラグラムに参加しようと思ったきっかけは、仲の良い中国人の友人や近所に住む中国の方から聞いていた教育事情について、実際に見て知ろうと思ったことであった。生徒と話す機会はそれほど多くなかったが、廊下に張り出されているテスト、足の速さの記録の張り出しなど、施設を見学している中にも激しい競争社会の中で生活している様子が見て取れた。そのような中でも、日本語を一生懸命勉強していたり、体育の授業の後にサッカーをしている姿などを見ると日本の子どもたちと変わらない面もあり、実際に自分の目で見なければ知り得なかった場面も見ることができた。

・教員の情熱

　どの学校の校長先生も学校に対して誇りをもっているように見えた。また、教員が誇りを持って仕事ができるようにしているのも校長の手腕だと聞き驚いた。そのような方がトップにいるからなのか、他の教員たちも自分の仕事に情熱と誇りを持って授業をされていた。教員のメンタルケアなどのサポートも厚いように感じた。そういう先生たちが授業をしているからか、生徒の勉強に対する情熱もとても強く感じた。

アクションプラン

1
PHASE

学びを還元する

・HRの生徒たちに他の国の同じ学齢の生徒について話す。（実施済）

・SSH発表会の時に生徒の発表の後に学んだことを伝える（対生徒、教員、保護者、他大学の先生方）（2025年６月予定）

PHASE
2

先生方に向けて

・興味のある先生方に機会を設けて話す（スタバ会実施済）。

・職員会議内で発表する。

3
PHASE

交流の第一歩！

・教科担として１年生の授業の中で中国の生徒と交流する機会を継続的に設ける（やり取り、Zoomで直接つながるなど）。
・西安科技大学のオンライン講座に応募する（SSH関連でつながる）。

PHASE
4

交流の継続化へ向けて

・定期的に同じ学校の生徒と交流することで生徒たち自身が「知る」段階から「探究心」を持って活動に参加できるような機会を設ける。

・ゆくゆくは海外研修で中国の発展している面を生で見せたい。

中国現地で得た経験・学び

１．　中国に対しての印象の変化

　初めは、正直中国に対してあまりいい印象をもっていなかった。日本で取り上げられる中国のニュースと言えば、反日絡みの言動、マナーを守らない民衆、領土問題で強硬姿勢を取る政府など。これらのニュースを繰り返し見るうちに、元々メディアの報道をあまり信用していない私ですら中国に対してネガティブな印象をもってしまったのだろう。
　しかし今回の訪中で接した中国教育国際交流協会をはじめとした現地の方々は本当に親切におもてなしをしてくださり、今まで中国のことを何も知らないのに、勝手に嫌悪感を抱いていた自分のことを恥じた。このことから私は、いかに自分の目で見て肌で感じることが大事なことなのかを再確認した。

２．　中国の教育

　同じ東洋の国なので、受験大国であることや、6-3-3-4システムであることなど大枠は同じ。しかし、日本が総合型選抜入試など新時代に合わせた受験システムを導入する一方で、中国は古き時代の学歴偏重社会がまだ根強く残っていると感じた。高校受験でふるいにかけられること、出身大学で就ける職が大方決まってしまうことなど、幼いころから競争を強いられて生活している。競争に勝ち残っていくためには引っ越しもいとわない。中国版キーコンピテンシー「中核的資質」を発表してはいるものの、一斉指導の知識技能の習得に寄った教育をしている印象を受けた。この競争の激しさは、中国や中国人のパワーの源であるようにも感じられた。日本が主体性重視、個性の尊重などある程度自由を認めていくスタイルになって以降忘れかけている国としての団結、目標へ向かうパワー、愛国心。中国に行ってたくさんの学校に行き、多くの教師と学生に接してきたが、皆自分の国や学校に強いプライドをもち、リスペクトしているように感じられた。このあたりの熱量の違いは日本も学ぶべきである。

３．　ICTの活用

　児童生徒のICTの活用に関しては、日本の方が進んでいる。中国は１人１台端末は整備されておらず、改めてGIGAスクール構想で小学校以上の全ての児童生徒に１人１台端末を急速なペースで配備した日本の教育は素晴らしいと感じた。中国はICTを教師が教えるために活用している印象がある。AIによる授業分析、生徒情報の管理など、日本よりも進んでいる面もたくさんあった。

アクションプラン

１　学びの還元

今回の事業で感じたこと、学んだことをより多くの教師たちに伝える。
・校内での報告会の開催
・市内教育研究会での報告会の開催
・私設教育コミュニティでのオンライン体験報告会

２　授業実践

今回の事業で感じたこと、学んだことを子どもたちの学習内容に合わせて授業する。
・６年社会科　「日本とつながりの深い国々」
・４年総合的な学習の時間　「共に生きる」
・５年道徳　「国際理解・国際親善」

３　コネクションの継続的な構築

日本の教職員には異動がある。パイプ役になる教員の異動によって縁が切れてしまわないように、継続的に交流が図れるようにする。
・現任校でのネットワークの構築とシステム化
・異動先の学校での新規ネットワークの構築

中国現地で得た経験・学び

１　教育における文化的背景と理念

道徳や規律を重視し、学ぶ姿勢が強く求められる。優秀な人材への集中投資がされており、今回の視察では教育格差やいわゆる普通の生徒の現状を知ることはできなかった。「学校に行くのは義務である」という文化があり、日本との教育観の違いを実感した。先生や生徒の交流の中で、「一生懸命学ぶ」姿勢や、規律を守る姿勢が印象的だった。視察で訪れた学校の生徒たちは英語や日本語を流暢に操り、異文化交流にも積極的。言語の習得が広い視野や国際感覚を育む基盤になっていると感じた。

２　中国の教育制度と施設

教育部や学校訪問を通じて、中国の教育方針が国の理念と深く結びついていると感じた。教育施設は非常に充実しており、最新設備が導入されている。IT教育の現場では国際的な技術連携をすることで、高度な技術を最大限に活用できると感じた。

３　都市・街の雰囲気、料理文化

北京や西安は歴史的建造物と現代的な都市開発が融合しており、スケールの大きさに圧倒された。街並みや観光地の美しさに加え、セキュリティの厳しさや、道路が広く信号が少ないなどの車中心の社会、治安の良さも印象的であった。料理文化では辛い料理が多い一方で、野菜料理や香辛料を生かした料理など、種類が豊富で見た目もよくとても美味しい。円卓を囲む食事文化には「みんなで分かち合う」精神を感じた。食材や調理法に独特の個性があり、中国の多様な食文化を実感した。

４　人々の温かさと国民性

親切で情熱的な人が多く、初対面でも積極的に助けてくれる姿が印象的。日本ではあまり見られない「感情をストレートに表現する」文化は、新鮮で心地よく感じた。

アクションプラン

１　教育現場での報告と共有

・授業での活用

中国の教育・文化などについて紹介し、異なる文化への理解や共感を通して、新たな視点や学びを提供したい。

・職員間の共有

教員向けのレポート資料やプレゼン資料を作成し、中国の教育視察で得た知見を共有する。研修会や校内報告会で、他の教員の教育活動に活用ができるよう得た学びを伝えたい。

２　技術・教育分野の連携

・AIやIT分野の共同研究

西安電子科技大学との交流を基盤に、AIやIT教育に関する共同プロジェクトや連携を提案する。技術交流などの開催。

３　情報発信

日本で伝えられる否定的なイメージを解消するため、教育視察で得た経験、学びを広く発信するための方策を考える。

中国現地で得た経験・学び

1.教育目標に即した実践

中国における教育は社会主義建設および中華民族の復興のために重要な役割を帯びている。国によって事情が異なるためその是非はさておき、教育目標を実現するという点においては、訪問したどの学校においても一貫性を感じた。日本でも度々、教育手法や教育評価が見直され、その度に方向性を見失っている気がするが、改めて「個人の人格の完成をめざす」という教育目標を一貫して据えた教育実践のあり方を常に検討してゆく必要があると感じた。

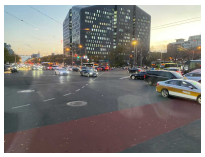
2. ホスピタリティ

どの学校•施設でも、個人の名前が印刷されたネームプレートがあったり、必ず一人ひとりにお土産が用意されていたり、とても丁重に我々を受け入れてくださった。それらをコーディネートしてくださった中国教育国際交流会のみなさんにも感銘を受けた。常に先回りをして我々をケアしてくれた。夕食後も本来はスケジュール通りに動くべきだが、我々の観光したいというニーズに柔軟に応えてくれた。今後それぞれの学校で国際交流事業を進めてゆく時、これらの姿勢は非常に参考になるものだと感じた。

3.豊かな歴史的背景と近代化された都市部

古来から中国は素晴らしい文明を築き、日本にも多くの影響を及ぼしている。始皇帝や永楽帝など、日本の教科書に登場する人物に縁のある施設を実際に目の当たりにすることができたことは、世界史を担当する教員として毎日が興奮の日々であり、何物にも代え難い経験であった。

また、今回生まれて初めて中国に訪問したが、メディア等を通じてこれまで自分が持っていた中国都市部に対する印象が随分と肯定的なものに更新された。都市部は、緑化が進み可視化された大気汚染などは無く、クラクションも殆ど聞くことがなく交通マナーが非常に良かった。観光客が集まりやすい場所では、昼夜問わず業者が清掃しており、ゴミがほとんど落ちていなかったのは驚きであった。次はぜひ、農村地域にも足を運びグラスルーツの情報を仕入れてみたいと感じた。



アクションプラン

1.教育目標に即した実践

⑴憲法および、教育基本法の解釈を改めて行いたい。
⑵資本主義社会を形成するとか、より競争力の高い人材を育成するといった、
　新自由主義的な発想からなる教育も必要かもしれないが、学習者が
　誰にも代わりえない尊厳ある個人として自己を認識できるような授業を行いたい。
⑶受験で使えるテクニックや知識をマシンの如く伝達することからいち早く脱却し、
　なぜ？といった問いをベースとし、生徒との対話を通じた授業を創造してゆきたい。
⑷様々な分野の教育実践論文を読んだり、全国の公開授業研究に積極的に参加し、見聞を広める。

2. ホスピタリティ

来年度、以下の国際交流事業を行う。
⑴予算が獲得出来れば、大阪•関西ユネスコスクール(ASPnet)ネットワークにて、
　日•中•韓•泰•比、5カ国高校生国際会議を開催する。
　※実行する際はReferenceとして「中国教育国際交流会」より、
　　海外ゲストのもてなし方を学ばせていただいた旨、一言添える。

3. 情報発信

今回の学びを以下で発表する。
⑴2025年度大阪•関西ユネスコスクール(ASPnet)ネットワーク総会にて。
⑵校内の教員研修にて。
⑶自らが担当する講座、特に世界史探究にて。

中国現地で得た経験・学び

- **<u>「中国」という国に対する印象の変化</u>**

　訪中前に全校生徒を対象に中国に関するアンケートを実施した。「中国に行ってみたいか」という項目では、約4割の生徒が「どちらかと言えばいいえ」・「いいえ」と回答した。その理由として多くあげられたのが、「治安が悪そうで怖い」「良いイメージがない」「反日の人が多そう」など、中国に対する負のイメージを持っていることだった。　自分自身も今まで中国に対して少なからず、ネガティブな印象を持つこともあった。しかし、実際に中国を訪れてみると、どこを訪れても、もてなしの心で我々を歓迎してくれ、1週間過ごした中で負の感情を持つことは一切なく、むしろ現地の方々の優しさに触れ、温かい気持ちになることばかりだった。自分が知ることができたのは中国のほんのごく一部ではあるが、このプログラムを通して、「真の中国」を知ることができ、今後生徒に本当の意味で「自分が経験し、知っている」中国を伝えることができるというのは、今回のプログラムで得られた大きな学びであり、財産である。

- **<u>中国と日本の教育の違い</u>**

　「義務教育」の捉え方（→不登校ゼロ）、一斉指導（＝「平等」という考え方）、家庭教育力の高さ、教員の労働環境（勤務時間、休憩所の設置etc.）など日本との違いを知ることができた。比較してどちらが良い、というものではなく、この学びから「今、目の前にいる子どもたちのために何ができるか」を考えることが大切だと感じた。

- **<u>発信力の高さ</u>**

　各視察先で、学校長や生徒から学校や街の紹介などに関する説明を受けた。中国語を理解できたわけではないが、話し方や伝え方、映像など端々から学校や教育観に対する熱い想い、その魅力を伝えたい！という情熱が感じられた。これは目指すべきものが明確になっており、そこに向けて強い信念があるからこそだろう。

アクションプラン

校内での活動

- 全校生徒への報告会の実施

訪中前に全校生徒に実施したアンケートの中で、生徒から募集した中国の同世代の子ども達への質問の中から、プログラム中に実際に中国の児童生徒に聞き取りができ、回答を得られたものを中心に、双方向的なやりとりを取り入れた報告とすることで、生徒が中国という国や人々に対して興味関心を持てるよう工夫し、異文化理解を促進する。

- 中国の学校との交流授業の実施

プログラム内で訪問した学校と連携し、オンラインで生徒同士が交流できる機会を作る。中国には多くの世界遺産があるが、奄美大島もまた2021年に世界自然遺産に登録されている。オンライン交流の中で、それぞれの国や地域の文化や世界遺産などを紹介しあい、互いの国の良さを伝え合い、知り、理解を深めるきっかけづくりにする。

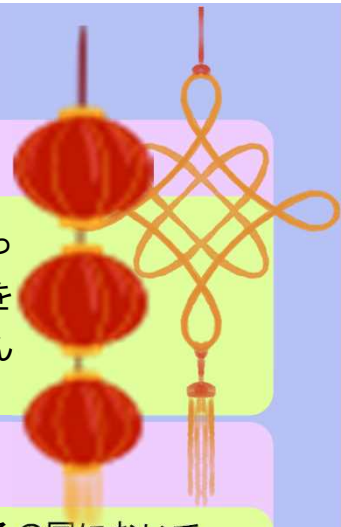
奄美大島には独自の文化が溢れているが、生徒にとっては身近すぎるゆえ「当たり前」になっているので、異なる文化や価値観を知ることで、自分達の島に対する良さも再認識し、互いの良さを尊重する態度を育みたい。

地域や奄美市の児童生徒に向けて

- 奄美市給食センターの栄養教諭と連携し、中国の食文化を紹介できるような献立を作成・提供し、奄美市の児童生徒（約3,500名）が、身近な「食」から中国について知り、「味わう」きっかけを作る。

栄養教諭との打ち合わせ済み→現在、献立の作成・試作中→2025年3月提供予定

リアルな中国を知って・・・



「ちゃんと知る」

この研修で中国をよく知る前の私は、中国への偏見をしっかりもってしまっていた。それは、多くの日本人が潜在的にもってしまっているものであるかもしれない。そんな中、中国で出会った人や国を愛する気持ち、暮らしやそこで生きる人々を知り、「私たちとなんら変わらない」と気づいた。確かめもしないで勝手なイメージだけで判断してはいけない。「ちゃんと知って、ちゃんと判断する。」忘れないでいたい。

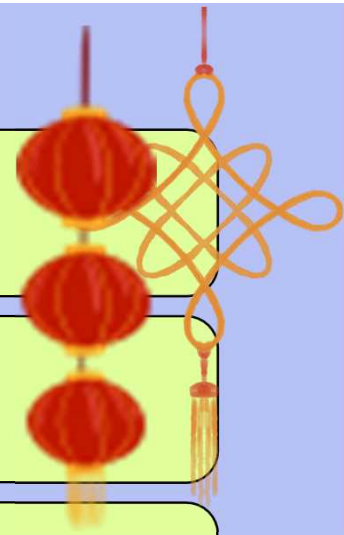
歴史と文化の中での教育の発展　～中国には中国の、日本には日本の～

今回の訪問で、一番に感じたことは、「歴史や文化が教育システムの形成に大きく影響している」ということだ。その国その国において歴史や文化などの背景があり、その背景の中で発展してきた教育がある。それは、日本の文化が創った日本の教育であり、中国にも中国の教育がある。日本の教育システムをそのまま中国にもっていっても機能しないかもしれないし、中国の教育を日本の教育システムにそのまま当てはめても機能しないかもしれないと思う。まずは、その国の歴史や文化を尊重し、それを認めるという気持ちが大事だと思った。「多様性を尊重する」を実感した！

やっぱり交流するって大事！　お互いから学び合える

また多様性を認めた上で、交流することで、自分の国や相手の国の優れた面をお互い発見しあって、さらによい教育ができるように、自分たちで考え、良い面を自分たちの教育に取り入れながらさらに発展させていけるように思う。それは交流することによってしか得られない大きな学びだと思う。私が感じた中国の素晴らしいところは、誠心誠意歓迎してくれるところ、素直にひたむきに学ぶ姿勢、教師の勤勉さと情熱、教師という仕事に誇りをもっているところ、管理職のリーダーシップのもとチームワークを大切にしているところ、また国際的な視野に立って物事を考えているところなどである。そして、中国の教育を知ったことで、日本の教育の素晴らしいところをより強く感じることができた。「自ら学ぶ」を大切にしているところ、個別最適な教育、協働的な学び。これら私が感じだ気づきを大切に生徒と関わっていきたい。また、交流する機会に積極的に参加することも大切にしていきたい。学び続ける自分でありたい！

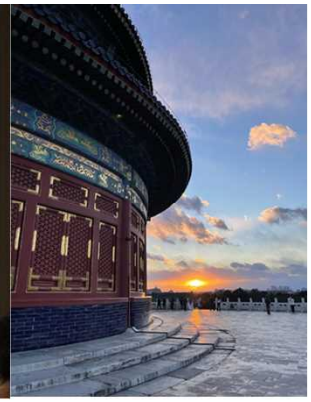
リアルな世界を伝えます！より多くの人に



生徒に	授業や通信で
勤務校の先生たちに	校内研修を企画します
教育委員会に	教育長を訪ねて報告します
より多くの方に	所属する研究団体でも語ります 機会を見つけていろんなところで！

交流します！

中国の生徒たちと	オンラインでつながり、リアルなお互いを感じさせたい



今回の中国訪問で感じたことや気づきとして、中国と日本は教育に重きを置いている根本的な部分が違うということがまず挙げられる。現在、日本は「個」に対してどう働きかけていくか、個性をどう伸ばすかなど〈個人にフォーカス〉しているのに対し、中国は愛国心や団結力、労働意識など〈社会にフォーカス〉している。集団でスローガンを言いながら走ったり、班ごとに加点したり、一斉学習など日本では行われていない（行われなくなった）教育方法もあるが、中国の先生はとにかく自信を持っているということを強く感じた。教師自身にも、学校にも、そして自分たちの児童・生徒にも誇りをもっており、全体として熱意やパワーを感じた。

また、子供を取り巻く環境にも大きな違いを感じた。中国ではICTやAIを活用し、地域格差をなくす教育方法が取られており、国として統一した教育が行えるよう、国からの要求も高いがその分サポートも手厚い。メンタルケアがしっかりしていること、教員の働く環境への配慮もしっかり確立されており、予算の使い方も含め、国をあげて教育に力を入れていることを肌で感じた。一方、これらの面から日本の教育は、もしかしたら子供たちを守りすぎてはいないか、と考えされられた。「良き昭和時代」という言い方が正しいかどうかは分からないが、日本に昔あった我慢強さや忍耐力、団結力や美徳・品徳、パワーのようなものが段々と薄れ、忘れられていることが子供達を弱くし、不登校などへ繋がってしまったりはしていないか、考えるようになった。教師がある程度山となってそれらを乗り越えさせていく過程で身に付くたくましさや解決力、経験や得られる自己肯定感、そのようなものを見直してみる必要もあるのではないかと考える。

教員の働く環境においては、国からのサポートがしっかりしており、支援を受けながら働けることは、精神的にも肉体的にもよいと感じた。「教師の良いパフォーマンスは良い環境からしか生まれない」と言わんばかりの熱意で語ってくれた先生たちの姿は印象的で、日本の教員も、誰もがそんな気持ちで前を向いて働くことができたら、教育界全体の底上げに繋げられるのではないか。

世界が仲良くなること------世界平和。

既に始まっている多様化・多元化社会についていくために、大人も子供も一緒に学んでいかなければいけないことがある。

なぜ勉強するのか？それは「自分を成長させるため」「社会で生きていく力をつけるため」「自分の選択肢を増やすため」「好きなことをもっと深く知るため」「他者と協力し、社会に貢献するため」など色々あるが、私は「共生」の手段であると捉えている。「相手を理解するため」には言葉を学び相手とのコミュニケーションをスムーズにすること、「文化や歴史を学ぶ」ことで他の人の背景や価値観を知り相手に対して敬意や共感を持つことがまずは不可欠であると考える。さらに、「違いを尊重するため」には多様性を知り、その違いを知ることが対立を避け、相手を尊重する第一歩になり、世界市民を育て、世界中の人たちと仲良くするための方法を考えるきっかけになると信じている。

学び続ける姿を児童に見せ続け、人と人を繋げる。そして日本と世界を結びつける。そんな存在で在りたく、そんな教師で在り続けるために、常にインプットすることを惜しまず、アップデートし続ける教員でいることを誓う。

今回の全過程を60ページのレポートにまとめ、製本業者を通して冊子にする
（動画閲覧もできるようQRコードも入れた）

①校内教員への情報共有とプレゼン、冊子の配布、日本語の漢字・簡体字・繁体字の違いについての資料作成、配布。（国語の授業で活用してもらう）各学年に中国 で購入した教科書を回覧し、児童、教員にどのような学習をしているのかを知ってもらう
②市内の全小学校、関連中学校、市教委へ冊子・資料の配布と回覧依頼
③前任校へ冊子・資料の配布と回覧依頼
④地域やコミュニティースクールの方々用の資料作成・配布・報告
⑤児童向け紹介パワーポイントの作成と中国の紹介
⑥音楽室前に設置している世界の言語コーナーに中国で購入した絵本と漫画を追加展示
⑦中国に関する本を購入し、自由閲覧できるよう展示
⑧12月21日（土）に行われる中国の先生との交流に参加
（内容をまとめ、校内、市内小学校、提携中学、市教委、前任校に配布・回覧依頼に配布）
⑨姉妹校、国際交流実施について学校へ提案するとともに、他教員に国際理解教育に興味をもってもらう